



多福寺周辺で行われている体験落ち葉掃きの様子。親子で参加する姿が多く、家族で町の歴史を体験することができます。三芳町自慢の行事となっています。さらに趣向を凝らし、楽しむ試みも。落ち葉上げコンテストを行い、どれだけ落ち葉を持ち上げられるかを競います。



昭和40年代に撮影された、落ち葉掃きをする一家の様子。広大な土地を家族だけで掃いていました。



2017年12月に川越で行われた武蔵野の落ち葉堆肥農法日本農業遺産認定記念式典に参加した皆さん。

武蔵野の落ち葉堆肥農法 江戸時代からの伝統 日本農業遺産認定



荒野が広がる武蔵野の大地に作物を作るため、江戸時代、人工的に木を植え林を作り、地下水をくみ上げました。さらに枯れた落ち葉を堆肥にして畑の肥料として活用をする農法を「落ち葉堆肥農法」と呼びます。首都圏内での農法が今も残っていることは珍しく、三芳町・所沢市・ふじみ野市・

川越市の3市1町と埼玉県いるま野農業協同組合で「武蔵野の落ち葉堆肥農法世界農業遺産推進協議会」を発足し、農林水産省に申請書を提出しました。申請のあった全国15県19地域から最終的に7県8地域が選ばれ、武蔵野の落ち葉堆肥農法もその一つとして、日本農業遺産に認定されました。

日本農業遺産とは

社会や環境に適応しながら何世代にもわたり形づくられてきた伝統的な農林水産業と、それに関わって育まれた文化、ランドスケープ、生物多様性などが一体となった農林水産業システムのうち、世界および日本における重要性、歴史的・現代的な重要性を有するものを農林水産大臣が認定する仕組みです。



江戸時代から続く農法を守り続ける 落ち葉の恵み。

みよし野菜の美味しさの秘密に「落ち葉」あり――。



三芳町は、武蔵野の美しい平地林と、整然と区画された畑を残す町として広く知られてきました。現在も多くの農家で平地林の落ち葉を堆肥にし、手間を惜しまずに先人の想いを守りながら、美味しい野菜を生産しています。300年以上守り続けられている落ち葉堆肥農法の元となる落ち葉掃きを多くの人に伝え、三芳町の歴史と先人の想いを体

験してもらうために、毎年1月から2月にかけて、町内各所で落ち葉掃きのイベントが行われています。落ち葉を堆肥にして作られた野菜のおいしさの秘密。それは、先人の知恵で育まれた武蔵野の落ち葉の恵みや、伝統農法を守り続ける農家の皆さんの想い、三芳町を愛する人たちの想いがたくさん詰まっていることなのかもしれません。

農業への理解を深めたい

――芳町の魅力の一つ農業を広めていくことが、地域活性に繋がると思い、落ち葉掃きイベントを20年続けています。例年延べ100人が参加している落ち葉掃きを体験したり、夏にはえだまめがりなどを行い、農業の楽しさ、理解を深めていく活動をしています。落ち葉で作られた肥料は土が元気になります。先人から受け継がれた畑をずっと守り続けていきたいです。



「(お父) いいね」

三富落ち葉野菜研究グループ 早川 徹さん

早川ポテト



早川さんが落ち葉堆肥農法で心を込めて作ったさつまいもを、たっぷりと使用したスイートポテト「早川ポテト」。三芳町のふるさと納税の贈呈品にもなっています。



藤澤ねほけ堂 / 住所：ふじみ野市龍久保 1857-1
☎ 049-262-0377 9:00～17:00 ※日・月・祝定休



評価された3つのポイント

独創的な事例

江戸時代初期に、農業的には価値の低い武蔵野の原野を当時の農村計画のもとに、住居、耕地、肥料採取地として平地林が一組として開発された歴史を有する独創的な事例である。

伝統的農法の継承

都市近郊の開発需要が高い環境下で、その景観と落ち葉を活用した伝統的な農法が、現在まで継承されたことは特筆される。

多様な成果がある

落ち葉掃きなどの作業には、周辺部の都市からのボランティアなどの多様な主体が参加しており、活動の維持、都市農村交流や環境教育の面でも成果をあげている。